

(Japanese Academy of Learning Disabilities)



日本LD学会会報

第48号

事務局：栃木県カウンセリングセンター内

〒320-0851 宇都宮市鶴田町687-9 ムギショウビル2F TEL.028-649-0090 FAX.649-1213

URL. <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jald/>

LD実習を通して考えること

吹田市立吹田第二小学校

森田 安徳

関西のLD実習はこれまで12回実施されている。私は第一回から講師を担当し、その様子を間近で見ることができた。実習の目的は、LDセミナーの講義で得られた知識を臨床場面で使えるようになることである。回を重ねる中で、参加者の多くが共通のポイントで困難を感じるようになってきた。これらの困難点は、言い換えるとLD教育士に求められている技能であると思う。

困難点の第一は、検査結果の解釈である。実習ではWISC-IIIを中心にいくつかの検査を用いる。しかし、参加者の中にはWISC-IIIを「触ったことがない」といわれる方が多い。検査の内容がわからないと解釈は無理である。実習以前に検査を体験し、予習しておくことが望まれる。

第二はエピソードの収集である。学校現場では検査以上に強く求められる技能であろう。行動面、学習面、家庭での様子、生育歴など多くのエピソードが収集される。どんな情報を何のために聞き取るのか、聞き取った情報から障害判断や支援方法へどのようにつなげるかを把握しておくことが大

切になる。LDの子どもたちに接した経験の少ない参加者には難しい課題であるといえる。

第三は指導の手だてである。参加者から発表される手だては、特別な場における指導内容が多くなる。通常学級での支援が考えられることは少ない。通常学級でどのように支援するか、普段から、授業内容や適応行動形成の方法を模索するように心がけたい。

第四は少し視点が変わるが、グループをまとめる役割である。実習中は7～8名で作業を進めるため、初対面の仲間と協調しなければグループはまとまらない。LD教育士として学校に帰ると、特別支援教育を推進するリーダーとしての役割が期待される。

参加者の困難点を述べてきたが、講師にとっての課題は更に大きい。自身の方法を明確にし、他の講師と整合性を図り、実習内容を効率よくシステム化する必要がある。参加者・講師ともに課題は多いが、実習で学ばれた技能が子どもたちに還るべく、ともに努力したいと思う。